

ひろ子が向かう東京

辻 憲男（文学部教授）

「国道の両側に、すき透るような秋の西日に照らされてのびやかな播州平野がひろがっていた」「空に軽い白雲が綺麗に漂っていて、荷馬車にゆられながらそれを眺めているひろ子の心をしずめた」。柔らかい畑土、キラリと閃く池水。荷馬車はかたりことりと東へ向かって、重吉に向かって進んでいく。「この国道を、こうして運ばれることは、一生のうちに、もう二度とはないことであろう。今すぎてゆく小さな町の生垣。明石の松林の彼方に赤錆びて立っている大工場の廃墟。それらをひろ子は消されない感銘をもって眺めた」。新聞で、重吉が網走から解放されることを知った。大雨のなか汽車を乗り継いで来たが、加古川から先が不通になってしまった。しかし今、荷馬車の上で、ひろ子は日本じゅうが新しい方向へ動きつつあることを痛切に感じていた（宮本百合子『播州平野』）。

小説は作者の実体験に近い。終戦直後の昭和20年9月、百合子は北海道へ渡ろうとしたが、切符が取れなかった。夫の母は、広島にいた弟の生存を絶望していた。そんな時の政治犯釈放の報は何とも言えぬ喜びであった。と同時に、同じぐらい生活の不安を感じた。夫が検挙されたのは結婚の翌年だった。それから12年間、獄中の夫に書き送った手紙は一千通を超えた。

小説には、姫路の宿で、ひろ子は重吉のことだけを思い、そうして行動すれば生活は拓けて来ると思った、とある。重吉もいま東京へ向かって帰って来つつある、その向かう中心に自分の存在がある、とひろ子は考えた。



明石市大久保町の国道2号線（現在）。
ひろ子の思いは、戦争を生きたすべての人々の思い。